

図書館報

発行所
愛媛県西条市丹原町
丹原高等学校
図書委員

視点を変える、

視野を広げる

教頭 岡本 淳



昨年五月、新型コロナウイルス感染症が五類感染症へと移行し、私たちの身近な環境や生活がコロナとの併存となりました。学校生活では、教室の換気を適切に行うことや、必要に応じてマスクを着用することで、ほぼ平常の生活を送ることができています。

一方、私たちの身近な環境や生活から視点を変えて世界に目を向けると、ロシアと

ウクライナの紛争(戦争)や、イスラエルとパレスチナの軍事的な衝突など、様々な問題が生じていることに気付くことができると思います。

戦争や軍事的な衝突と云えば、男性兵士が命を懸けて戦う、兵士Ⅱ男性というイメージを持っていませんか。戦争(軍事的な衝突)は、男性だけで語られるものではなく、女性や子ども、お年寄りなど、その時を生きた人々すべてが当事者となるものです。

ここで、第二次世界大戦当時、ドイツとの戦闘に従軍した旧ソ連の女性兵士からの聞き取り調査をまとめた、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』という本の一節を紹介いたします。

スタニスラワ・ペトローヴナ・ボルコワ少尉(当時)は、「私は二つの人生を生きてきた気がします。男の人生と女の人生を。学校に入るとそこではすぐに軍事規律。軍事教練でも隊列を組むことでも、兵舎でも、何もかも軍律でした。女の子だからって甘やかしてはくれません。(中略) 女らしいことをしたくないんですが、絶対許されませんでした。」と語っています。

これは、彼女を含め、戦場に赴いた女性兵士が「兵隊であることを求められたけれど、かわいい女の子でもいたかった」ことを表していると思います。

私たちが生きる世界には、既に獲得している知識や観念だけではすべてを語る(知る)ことができない、ということが多々あります。兵士Ⅱ男性というイメージだけでは、その中を生き抜いた女性の心情を知ることや語ることが

できません。私たちがこれから生きていく時代は、より豊かでより便利となることを誰もが期待していると思えます。しかし、豊かさや便利さを享受する生活の中で、社会が複雑化していくことも避けることはできません。これからの社会で丹高生一人一人がたくましく生き抜いていくためにも、身近な日常生活の中あらゆる出来事や事象を普段とは違った視点で捉え、考え、視野を広げることで適切に判断する力を身に付けてほしいと願っています。また、視野を広げて物事を見つめることで、より豊かでより便利に暮らすことができる世の中を築き上げていく、そのような明るい未来となることを心から願っています。

最後に、図書館は「知の宝庫」です。日々の学習で疑問に思ったり、自身の課題を解決したいと思ったりしたときに、積極的に本を手に取り、自らの教養を高めていきましょう。

私の読書体験
新任の先生方より原稿を寄せていただきました。

『ゾウの時間ネズミの時間』
〜サイズの生物学〜
本川 達雄 著
地歴・公民科 西村 和浩

そもそも高校生の頃に本を読んだ覚えがありません。時間があればNBAを観ていた。読書週間か何かで、たまたま図書館で借りた本がこの本だ。

「哺乳類の心臓は一生の間に約二十億回打つ。それはゾウでもネズミでも同じである。という事は、心臓の拍動を時計として考えたらゾウもネズミも同じ長さだけ生きて死ぬことになる。」

	<p>この本は、このような冒頭から始まったと思う。『鶴は千年、亀は万年』という言葉があるように、生物ごとに寿命の差異があることは当然知っていたが、その冒頭に引き込まれた。ゾウやネズミだけでなく、昆虫・棘皮動物・植物など地球上のあらゆる生物の視点から、時間・生物のサイズというものを考えさせられたことを覚えている。生物の授業が好きで読み始めただけだったが、時間という不変だと思っていた固定観念を再考させられ、非常に面白かった。</p> <p>読書は新たな学びが得られるなど実感した大したことのない経験談である。きっかけは何でもいい。本を手にとってみてはどうだろうか。</p>
<p>……。あらゆる観念から、前</p>	<p>『姑獲鳥の夏』 京極 夏彦著 地歴・公民科 瀧嶋 大樹</p> <p>「この世には不思議なことなど何もないのだよ、関口君。」</p> <p>百鬼夜行シリーズの第一段。売れない小説家である関口異と、憑き物落としが副業の古本屋、京極堂が出逢う(一応)ミステリー。二十カ月身籠った妊婦、その夫の密室からの失踪、嬰兒消失事件。時は昭和二七年、久遠寺医院で巻き起こる様々な謎をあなたは解き明かすことができるか。……</p> <p>と云いつつも、読者が謎を解くことは無理です。不可能です。</p> <p>この本の魅力は、「認識や」世界“などに対する著者の解釈の深さと構成の芸術性です。妖怪奇譚、民俗学、哲学、宗教、果ては量子力学や世界五分前仮説等々……。あらゆる観念から、前</p>
	<p>述した二人の対話という形式で、脳・意識・心の関係や、自分たちが生きている世界などについてひたすら語られま</p> <p>す。分量でいうと百ページ程。本当にそうかも”と思わせる魅力がある一方、正直読むのを挫折するポイントでもあります。しかし、ここが物語の中核です。頑張ってください。ここを乗り越えれば、後は怒涛の展開に身を任せ、坂を転がり落ちるのみです。その中で、先の対話の内容や、すべての謎が一つにつながっていく様は非常に芸術的です。最後に待つ衝撃かつ凄惨な事実に期待してください。</p> <p>「今認識している世界は、仮想現実である」と言われてあなたは納得できますか。</p>
<p>最後に、私が好きな本を一</p>	<p>『博士の愛した数式』 小川 洋子 著 数学科 竹田 有輝</p> <p>私には、後悔していることがある。高校生時代、以下のことを行わなかったことである。それは、「筋トレ」(家で腹筋をしたことがない)、「好きな子への告白」(人生後悔ランキング暫定一位)、「読書」(本当にした方がいい)だ。本を読むことが好きだったはずが、いつしかそれが単語帳に変わり、携帯に変わっていったように感じる。</p> <p>非常にもったいないことだ。読書は、知識や教養がつくだけでなく、文章力の向上、何より様々な価値観に触れる「最高の自己投資」であると大人になった今は思う。</p> <p>ぜひ、私と同じで読書習慣がない人も本を一冊手に取り、毎日十分でも読書の時間を作ってみてほしい。</p>
<p>出版されたばかりの新作で</p>	<p>冊紹介させてほしい。小川洋子さんの『博士の愛した数式』という本だ。記憶が八十分しか持続しない数学博士とそのもとに派遣された家政婦(私)、その息子(ルート)の三人の物語で、タイトルからは想像がつかないような心温まる作品となっている。数学の話も出てくるが、必ず本の世界観に引き込まれるはずだ。是非読んでみてほしい。</p> <p>本との思い出 英語科 坂本 佳織 高校生の時は、あまり本を手取るタイプの学生ではありませんでした。暇な昼休みを過ごしていた日、めずらしく図書室へ足を運んでみたことがありました。すると図書室の先生に、分厚く、かつ、上下二冊もある、宮尾登美子の『蔵』を読むことを勧められ、借りました。当時、</p>



したが、私には馴染みのない
どこかの方言が多く使われて
いたためあまり興味を持て
ず、2ページほどで読むのを
やめました。返却時に再び先
生から「どうだった？」と感
想を求められ、「方言がきつ
めでした。」と適当なことを
言って返却し、決まりが悪い
思いをしました。これが高校
時代の図書室における唯一の
思い出です。それ以来、分厚
い本を見かける度に先生との
やりとりをトラウマのように
思い出し、申し訳ない気持ち
になります。しかし高校卒業
の頃に興味を持てる分厚い本
に出会いました。『ソフィー
の世界』です。これは面白か
った。丹原高校の図書室に置
いてあったので、現在、二十
五年ぶりに再読中です。みな
さんもお気に入りの分厚い
本、見つけてみてください。

本との思い出

家庭科 町野 博子

改めて本棚を見ると、食べ
物に関する本が多い。
まずレシピ本。読書とは言
えない気もするが、同じ料理
でも分量や、手順が違ってい
るので、読み比べると、とて
もおもしろい。結局食べてお
いしいと思えるレシピの載
っている本を選ぶので、気に
入った出版社や料理研究家
の本が集まっている。

そして、食品ができるまで
のエピソードが書かれた本。
特に、豆腐や寒天のような古
くから伝わる食品や、新しい
食品の加工や商品化にまつ
わる話には、一つの食品の中
にいくつもの驚きや感動が
ある。たまにテレビで取り上
げられていることがあつて
も、出会う確率がとても低い
ので、本の方が良い気がす
る。インターネットで情報を
集めることもできるが、本の
引用ばかりのことも多く、驚

きや感動にはあまりつなが
らない。
料理に携わる人が書いた
エッセイは、食についていろ
いろなことを考えさせられ
る。一つの料理に多くの人が
関わっていて、いろいろな思
いが込められていることを
教えてくれる。

朝読書の時間は普段より
少し早く教室に入って、是非
本を読んで欲しい。

借りない図書館

農業科 別府 和則

駐車場から公園のような
中庭を通りガラス張りの玄
関に入る。吹き抜けに伸びる
ベンジヤミンを見上げ、左の
雑誌コーナーの水色ソファ
一群をすり抜け、その奥に並
ぶ書架を覗きながら歩く。

さ、さ、さ、さわ、さわ、
さわ… 沢木耕太郎。お、今
日はいましたね。ややくたび
れた一冊を手に取りツツキ
のページを探す。前はたしか

…いよいよ登頂するあたり
だったか…

この本『凍』は、無酸素ア
ルパインスタイルで夫婦が
挑む登攀ノンフィクション
である。その山ガチュンカン
は七九五メートルで隣は
エベレスト。

『…ロープは不要と断った
妙子だったが、この岩の最後
の一步だけはなかなか踏み
出せなかった。どう考えても
落ちてしまいそうだからだ。
足を滑らせれば千メートル
は一気に墜落することにな
る。…』

標高七千メートルの氷雪
壁にピッケルを一時間振り
続けやつと五十センチの窪
みを作り二人で張り付くよ
うにビバークする。

山頂まであと四五〇メー
トルのところ妙子は断念
するも山野井が登頂に成功。
その後、懸垂下降する二人を
雪崩が何度も襲う。
雪の塊に体を吹き飛ばさ

れながら、山野井は必死に叫
んだ「妙子、止めてやるぞ！」
しかし、妙子を確保している
ロープはものすごい勢いで
グロープの中を抜けていつ
た。

ロープはやがてピンと引
つ張られた状態で止まった。
妙子は五十メートル以上落
ち、山野井のハーネスには妙
子の全体重がかかり、支点と
のあいだで身が引き裂かれ
るようにつながれて動けな
い。

山野井はロープの下に向
かって叫んだ。

「妙子！」

崖は急になり、下はかすか
に張り出している。そのため
その下で妙子がどのような
状態にいるのかわからない。

「妙子！」

何度呼んでも応答がない。
生きているのか、死んでいる
のか。意識を失っているの
か。山野井は懸命に引つ張り
はじめたが、岩が張り出した

ところを支点としてまった
く動かない。

妙子は気がつく、体が逆
さまになっていた。千メート
ルの宙ぶらりん。上をみると
岩の角でロープが切れそう
になっている。七ミリのロー
プの黄色い外皮は切れ、中の
白い芯も切れかかっている。
そのロープを山野井が懸命
に引っ張っているのがわか
った。

「引かないで！」
必死に叫ぶが風に掻き消さ
れる。

「金髪の男」

農業科 加藤 太一

私が大学生の時のお話で
す。大学に入学してから本を
読むという行為は全くな
くなり、読書とは無縁の生活
を送っていました。そんな
時、実家から珍しく仕送りが
送られてきました。大きな段
ボールを開けて目にしたも
の。それは、「ローランド」の

本でした。「世の中には
二種類の人間しかいな
い。俺か俺以外か。」で
有名な金髪の人です。ま
ったく意味が分かりませ
んでした。両親は私に何
を伝えたいのか。自信も
って生きろという力強い
メッセージなのか。ボケ
て送ってきたのか。だと
したら全く面白くありま
せん。この仕送りの答え
を私は未だに怖くて聞け
ません。皆さん、どうい
う意図があつて送ってき
たと思いますか。ぜひ教
えてください。本を読む
ことは多様な価値観や考
え方を学ぶことができる
手段のひとつであると思
います。たくさんの言葉
を読んで、見て、聞いて、
自分自身を成長させる材
料にしてください。



「陽気なギャングが
地球を回す」

養護教諭 黒島ちひろ

私はまだ実家で暮らしてい
た頃に出会った本です。県外
に出ている兄が帰省のお供に
持ち帰ったものが、伊坂幸太
郎さんの小説でした。何気な
く借りてページをめくった
ら、面白くて止まることなく
一気に読み終え、映画を一本
観た後のような爽快感で大満
足でした。ちなみに、後に映
画化されています。

以来、私も実家を出た後、
読んで面白かった本は実家に
持って帰り、家族と共有して
いました。同じ本を読んで、
親や兄妹とたまに感想を言
合ったり、お気に入りの作家
さんの新刊を買うのを我慢し
ていたら、誰かが買って置い
てくれたりと、本は離れて暮
らす家族のコミュニケーション
の手段だったように思いま
す。

丹高の図書室にも、伊坂幸

太郎さんの著書が何冊かあ
ります。人気の作家さんだ
けあって、どの本もハズレ
なしの面白さです。勉強の
息抜きに、スマホ代わりに
手にしてみてください。

私と読書

事務課 渡部 千代

小学校時代は、夏目漱石、
芥川龍之介、中学校時代は、
星新一、アガサ・クリステ
イ、高校時代は『長くつ下の
ピッピ』、『ナルニア国物
語』、そしてプレゼントされ
た岩波文庫五十冊を読ん
でいました。

大学時代は、田辺聖子、林
真理子、山本周五郎、遠藤周
作、北杜夫(いずれも敬称略
でごめんなさい)の本を読
みました。いずれも好きな
作家の作品をたくさん読む
という読み方でした。

独身時代は、本屋さんに
行って、気になるタイトル
(たとえば、「かしこい女に

なりなさい」とか見つけて読
みました。この頃雑誌(クロワ
ツサン)も読むようになりま
した。結婚してからは、雑誌
は、婦人公論に替わり、江原さ
ん、美鈴さん達のスピリチュ
アル系の本を読むようになり
ました。

小説よりは、エッセイ、フィ
クションよりは、ノンフィク
ションと好みが変わって来ま
した。

最近買った本は、『二〇二歳
哲代おばあちゃん』という本
です。令和五年七月に前期高
齢者になりました。老いの淋
しさ、痛みをつくづく感じて
います。本を通して他を疑似
体験し、心の求めに答えを見
つけるようになりました。

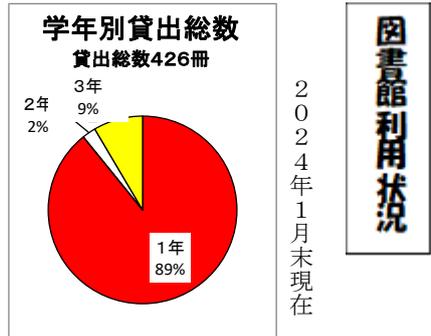
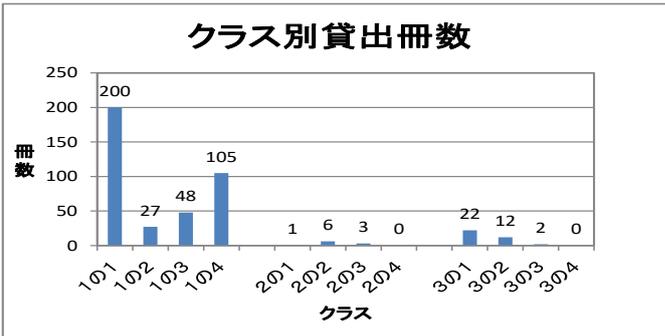


<p>「キーエンス思考」Chat GPT時代の付加価値仕事術 田尻 望 著 ICT教育支援員 八木 眞紀</p>	<p>本を読まない日はない。ジヤナルの違う本を同時に読むことも多い。直近で読み終えた冒頭の本の話をしたと思う。</p> <p>著者は、二〇二三年の三月に公開された「GPT4」で人間の専門知識を上回るAIの存在を大きな脅威と感じ、自己喪失感に苛まれた。しかしAIを敵ではなく共に進んでいくためのツールとし活路を見出せるようになっていった。この本には、AIをツールとして使いこなしていく方法が書かれている。</p> <p>百聞は一見に如かず。Chat GPTを使ってみることにした。まず連想ゲームを試みることにした。「広い」↓「空」とやりとりが始まる。</p>	<p>入力する言葉で内容も方向も広がり変わっていくと感じた。最後に締め括りとしてゲームの講評を質問した。</p> <p>『連想を通じて様々な単語や概念を探り、新しいアイデアや関連性を見つけ出すのにより手段でした。単語の置換や連鎖によって、異なる視点やアプローチを見つけることができ、創造的な思考を刺激するのに適しています。連想ゲームは柔軟な発想力を養うのに役立つだけでなく、協力して進めることでコミュニケーションスキルや共同作業の重要性も強調されます。ゲームを通じて新しいアイデアや展開が生まれることを楽しむことができ、参加者全員が共同で創造的なプロセスに参加できる素晴らしい方法です。』</p> <p>との返答だった。</p> <p>AIはすぐく役に立つツールになると感じたが同じくらい危険なものであると感じた。</p>	<p>これを使いこなしていくには思考力、判断力が大切だ。AIには、相手の心を読む「マインドリーディング」はない。統計的な計算をしているだけである。だからこそ、AIを共に進んでいくツールとして使いこなしていくため、何が必要であるか考えるきっかけとなったと思う。</p>
<p>『タガヤセ！日本』 永井 琉菜</p>	<p>『うちの父が運転をやめません』 近藤 優衣</p>	<p>『いのちの車窓から』 木村 心温</p>	<p>『うたがやせ！日本』 永井 琉菜</p>
<p>読書感想文優秀者発表</p>			
<p>‘Matilda’ Chloe Spearing</p> <p>One of my favorite books when I was younger was ‘Matilda.’ There have been 2 movies and a musical made about it but nothing beats the original. The book follows young genius Matilda as she starts school. With a tyrannical headteacher Miss Trunchbull and a lovely teacher Mrs. Honey, and her uncaring family. It is loved by families and is a great read. The author is very famous in England, and many of his stories are now movies. This book is a childhood classic for so many English people, definitely recommend!</p>			
<p>『うたがやせ！日本』 永井 琉菜</p>	<p>『うちの父が運転をやめません』 近藤 優衣</p>	<p>『いのちの車窓から』 木村 心温</p>	<p>愛顔感動ものがたり エピソード部門 知事賞</p> <p>未来のノート 三年 越智 亮介</p> <p>私は、母のことを知らない。人柄はどうだったのか、何が好き・苦手だったのか、口癖は何だったのか。何一つ知らなかった。</p> <p>私が二歳のころ、母は、病気によってこの世から旅立った。何が起きたかもわからなかった私を、父は葬儀後、祖父母がいる愛媛に連れて帰ってきた。しばらくは父の兄弟も祖父母の家に来て、私の世話をしてくれた。保育園に入ってしまったら、私を毎日送り迎えしてくれるのが祖父母と父であり、周りは母親が送り迎えをしていることに疑問を感じ始めた。ある日私は、父や祖父母に「なんで周りはお母さんが迎えに来ているの？」と質問をした。父は「アイスマイに行こうか。」とごまかした。</p>

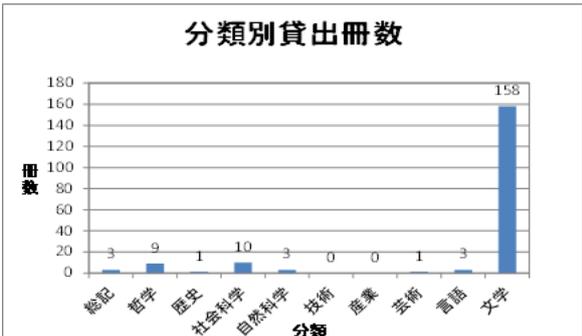
今思えば、父に申し訳ないことを言ってしまった。私が六歳になったころ、父は母がこの世を去っているんだと話してくれた。本当は自分自身でもどこかで分かっていたけれど、いないと聞いたときは泣き叫んでいた。中学生になったころ、私は部活動の人間関係で悩むことが増えた。精神的に限界になったとき、父がドライブに連れて行ってくれた。父は車の中で「逃げたいときは逃げてもいい。だけど自分にとって後悔が残るなら戻ればいい。」と言った。そして、この言葉は、父が仕事や人間関係で悩んでいるとき、いつも母が言ってくれたのだと話してくれた。私はこの言葉をきっかけに、もう一度頑張ってみようと思った。高校生になったある日、父と倉庫の整理をしていた私は、ある段ボール箱を見つけた。中には、私の幼かったころの写真と、何冊もの成長日記が入っ



ていた。ページをめくると、母の字で、私ができるようになったことや嬉しかったことが書かれていた。あるページで私の目は止まった。そのページには、「優しく、誰にでも愛される存在になってほしい」と書かれていた。
母は亡くなるまで、私のことを愛情いっぱい大切に育ててくれた。私はそのことを知り、どんなに時間が過ぎようが、母は私にとって唯一無二の存在だと思っ



図書館利用状況



図書館報発刊に寄せて
今年度も、図書館報を発刊することができました。
昨年度は、先輩方の頑張りで、自分たちは訳も分からずにやっていただけでした。しかし、今回、実際にやってみると、期限に間に合うか大変不安でした。
原稿の協力をしてくださった先生方、ご協力ありがとうございました。ごさいました。
先生方の読書体験の原稿を、打ち込むに当たって読ませていただきました。とても印象深く、ぜひ、皆さんにも読んでほしいと思いました。
三年生の先輩方が来られなくなり、図書室の雰囲気も少し寂しくなりました。図書室には、映画やドラマ、アニメの原作や、面白い本がたくさんあります。ぜひ、本を読みに図書室に足を運んでみませんか？
(図書委員会)